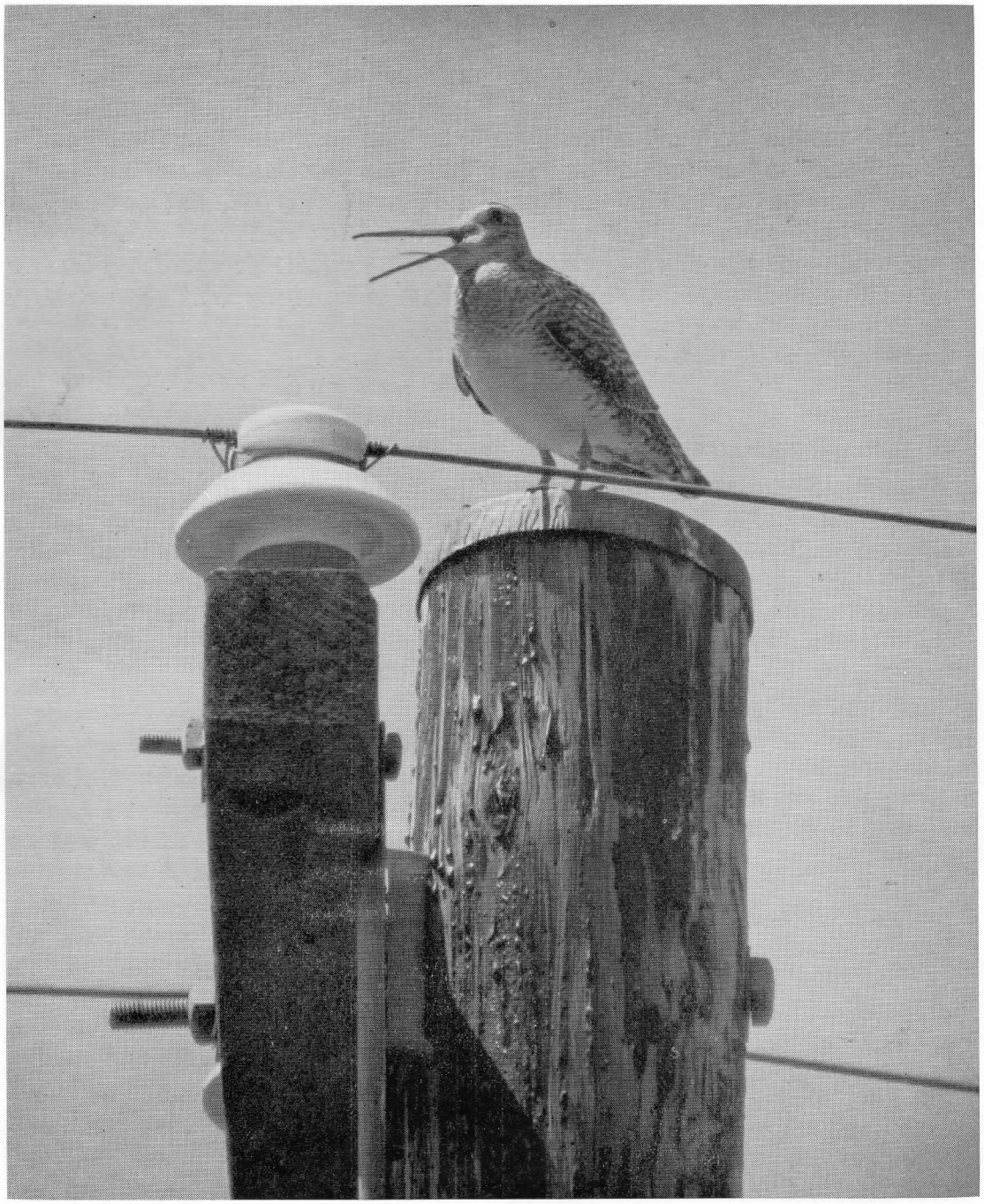
野鳥だより

—北海道—

第 24 号
編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和51年12月21日



オオジシギ　苫小牧市弁天で　昭和51年5月30日　撮影 野村梧郎

日　高　の　鳥

――様似町を中心に10年間の観察記録――

佐　藤　辰　夫

1. はじめに

筆者はかつて10年ほど、日高の様似町に住み、ここを中心に鳥類の観察を行なってきました。豊かな自然が残っているこの地域に、どんな鳥が生息しているのだろうかという、いたって素朴な問に自ら答えるべく、あちこち歩きまわってきたわけです。

日高の鳥類については調査報告も少なく、その鳥相についてはまだ十分に明らかにされたとはいえません。この報告も不十分なものではありますが、今後行なわれるべき本格的な調査のために、いくらかでも参考になれば幸いです。

2. 観察の期間、方法および地域

観察は1963年4月から1973年3月までとその後も年に数回、不定期ではありますが、四季を通して行ないました。鳥種の識別は、肉眼、8倍の双眼鏡および25倍のプロミナーで行ないました。

観察地域は、様似町を中心とした日高南部で、海岸線にすると100kmを越えますが、主な観察地点は次のとおりです。

新冠判官城跡、静内川河口、真歌山、御殿山、新冠種畜牧場、春立海岸、三石川河口、元浦河河口、井寒台海岸、浦河港、幌別川河口、日高種畜牧場、塩釜～親子岩～様似港～エンルム岬、観音山、アポイ岳、幌満岳、幌満川上流、えりも港、歌露～油駒海岸、エリモ岬、悲恋沼、庶野港。

3. 観察結果および説明

現在までに筆者が確認した鳥類は41科153種（亜種を含む）で、これを渡来状況で分けると、留鳥34種、夏鳥61種、冬鳥41種、旅鳥16種、迷鳥1種となります。以下、フィールドノートをめくりながら科ごとに簡単に説明して行きます。

① アビ科

オオハム、ハシジロアビとも、11月下旬から翌年の4月頃まで少数、ほとんど単独でみられます。71年11月23日エリモ岬において、オオハム64羽を観察しましたが、冬季日高沿岸でこのような群はみられず、本州方面へ行く途中のものと思われます。また、71年6月19日、幌満川の上流10km位のところで、夏1羽をみていますが、これは渡りのコースに関係があるかも知れません。なお、この夏羽の美しいオオハムは、翌日、心ない鉄砲うちによって射殺されてしまいました。

ハシジロアビはオオハムより少なく、エリモ岬から庶野にかけての海上や庶野港で、ごく少数みられる程度です。

② カイツブリ科

ハジロカイツブリ、アカエリカイツブリとも、冬期間ごく少数がえりも港、庶野港付近でみられました。

③ ウ　科

ウミウは1年中いますが、夏季は様似からえりもまでの岩礁上にごく普通にみられ、冬季はえりも港から庶野港までの海岸で多くみられます。様似の親子岩では5月の中旬頃から巣づくりが始まるらしく、海藻をくわえて飛びかう姿がみられます。

④ サギ科

アマサギは65年5月様似町、66年5月、72年、73年えりも町でいずれも夏羽1羽が観察されています。この鳥は近年分布を拡大しているという事ですが、毎年飛来するわけでもなく、また繁殖の証拠もありません。

アオサギは新冠町大富のコロニーが有名になっていますが、残念ながら私はまだ行った事がありません。私がはじめてアオサギをみたのは様似町を去った年の5月です。静内川河口の上空をゆっくりと軽やかに飛ぶ4羽のアオサギを、ポカンと口をあけて見ていた次第です。その後も何度か観察していますが、76年1月5日静内川河口で1羽を目撃しました。この鳥は夏鳥とされていますが、ウトナイ沼の例もあるように、いくらかは越冬するものもいるようです。

その他のサギについては、白サギの1種を目撃していますが、種は確認しておらず、また生息しているといわ

れるヤチベコ（サンカノゴイ？）についても確認できませんでした。

⑤ ガンカモ科

コクガンはじめ21種を挙げることができますが、ガン類はほとんどその姿を目にする機会はありません。

コクガンもここ10年余確認されていなかった様ですが72年11月にえりも町東洋で1羽を観察する機会に恵まれました。その後も同一個体と思われるものが、73年1月、3月いずれもえりも港付近でみられました。

オオハクチョウは毎年10～30羽位が飛来し、2月上旬から3月下旬頃まで滞留します。例年多く見られるのはえりも町歌別の海岸で、ここは淡水が注入し、アマモや海藻などが豊富なところです。その外、ごく少数ですが様似川、幌別川、元浦川、静内川その他の河川にも飛来する事があります。なお飛来のコースについては不明ですが、73年3月18日午後3時頃、25羽の群が様似川上流を25倍のプロミナーで識別できなくなるまで、真っ直ぐ日高山脈の白雪にすいこまれるように飛んでいったのを目撃しています。

カモ類ではクロガモ、シノリガモ、マガモなどが多くこれらは11月から翌年5月中旬頃まで滞留します。シノリガモの中にはまれに夏を越す個体がみられました（71年エンルム岬♀2）。なお冬季カモ類は様似～えりも海岸に多いが、観察場所としては、えりも港、庶野港、様似港、浦河港付近が適当です。

⑥ ワシタカ科

トビは周年生息していますが、冬季は海岸に多く集まり、様似町観音山付近では100羽以上の群舞を見る事もあります。

オジロワシやオオワシもわずかながら渡りの途中羽根を休め、73年の1月から4月までに、エンルム岬や観音山付近でオジロワシの成鳥2、幼鳥2を見る事ができました。

ハイタカは夏季アポイ岳などの山地でわずか見られる程度です。冬季は麓でまれに見る事があります。

ハイイロチュウヒはまれで、私が様似にいるあいだ1度も見る機会がありませんでしたが、75年1月6日午後1時頃、静内町田原で水田や人家近くを低空でヒラヒラと飛ぶ♂1羽を観察する事ができました。どういうわけかこの冬は、74年12月1日にウトナイ沼で、同じく12月31日厚真町本郷でいずれも♂1羽を目撃し、そして二度ある事は三度あるという例え通り、今回の静内での出会いとなった次第です。まことに近年まれにみる好運に恵まれた年末年始でした。

⑦ ハヤブサ科

シロハヤブサは冬季北海道にも渡来するが、ごく少数らしく、私も67年1月に様似町平宇の山林で1度だけ観察する機会を得ただけです。凍てつくような寒い朝、しばらくあちこち歩いてふと足をとめて手前の木を見ると白いタカがとまっていました。夢に見たシロハヤブサでした。その精悍な野性の姿にただただ見とれていた自分を思い出します。

⑧ キジ科

コウライキジはもともと北海道に生息していた在来種ではなく、いわゆる帰化動物の1種ですが、近年よく繁殖しています。冬季は5～10羽位の群をなし、田畑、牧場のほか市街地にも姿を見せます。数が増えたせいか今頃狩猟解禁の動きがあるようですが、その生息場所から考えても危険であり、やはり身近な人里の鳥として保護して行きたいものです。

⑨ チドリ科

コチドリは少数ですが各河川の川原などでみられ、シロチドリはコチドリよりも少なく、幌別川の川原などでみられる程度です。なおコチドリの中には越冬するものもあり、1月の雪の川原でたたずむ姿をみた事があります。

⑩ シギ科

日高には干潟と呼べるような所はほとんどなく、シギたちが渡りの途中羽根を休めるところは川原か磯のようなところしかありません。そのためか種類も数も少なく大きな群はほとんどみられません。ただ71年5月22日幌別川の河口で70～80羽のチュウシャクシギとハマシギらしい50羽余りの群をみたことはあります。

⑪ カモメ科

オオセグロ、セグロ、ウミネコ、カモメなどは比較的数も多く、ついでミツユビ、シロは少数です。ウミネコの中には少数ですが越冬するものもいます。ユリカモメが見られるのは5月中旬から下旬で、冬羽の中に頭の黒

ミツユビカモメの幼鳥　　撮影　梅木賢俊

くなった夏羽もいくらか混ざっています。72年5月13日午後4時頃、幌別川河口で釣りをしていた時、沖の方からくの字形の50〜60羽のカモメの編隊が次々と姿を現わしては上流へ飛んで行きました。カモメが川の上流へ飛んで行くのを見るのははじめてなので、何というカモメだろうかと双眼鏡をのぞくと、なんとユリカモメでした。その後27日、28日にも同じ編隊が見られました。双眼鏡の視野から消えるまで、何かにひかれるように日高山脈に向って飛んで行くのを眺めながら、何か異様なそしてまた渡りのもつ神秘さに心打たれた事があります。日高山脈を越えてオホーツクの海にでも行くのでしょうか、それとも十勝の方へ出て海岸づたいに北上するので

日高産鳥類目録

渡来状況（S夏鳥　W冬鳥　P旅鳥　R留鳥　V迷鳥）

科名	種名	渡来状況	生息場所
アビ	オオハム	W.P	F
	ハシジロアビ	W	F
カイツブリ	ハジロカイツブリ	W	F
	アカエリカイツブリ	W	F
ウ	ウミウ	R	F
サギ	アマサギ	V	D
	アオサギ	S	C
ガンカモ	コクガン	W	F
	オオハクチョウ	W	F
	オシドリ	S	C
	マガモ	W	F
	カルガモ	P	F
	コガモ	P	C
	ヨシガモ	P	C
	オカヨシガモ	P	C
	ヒドリガモ	W	F
	オナガガモ	W	F
	ハシビロガモ	W	F
	ホシハジロ	W	F
	キンクロハジロ	P	F
	スズガモ	P	F
	クロガモ	W	F
	ビロードキンクロ	W	F
	シノリガモ	W	F
	コオリガモ	W	F
	ホオジロガモ	W	F
	ウミアイサ	W	F
	カワアイサ	W	C
ワシタカ	ミサゴ	S	F
	トビ	R	B
	オジロワシ	P	F
	オオワシ	P	F
	ハイタカ	R	G
	ノスリ	R	A
	クマタカ	R	A
	ハイイロチュウヒ	W	D
ハヤブサ	シロハヤブサ	W	A
	ハヤブサ	R	B
ライチョウ	エゾライチョウ	R	A
キジ	ウズラ	S	B
	コウライキジ	R	D
クイナ	ヒクイナ	S	C
チドリ	コチドリ	S	C
	シロチドリ	S	C
シギ	キョウジョシギ	P	
	トウネン	P	
	キアシシギ	P	
	イソシギ	S	C
	チュウシャクシギ	P	F
	ヤマシギ	R	A
	タシギ	P	C
	オオジシギ	S	B
ヒレアシシギ	アカエリヒレアシシギ	P	F
カモメ	ユリカモメ	P	F
	セグロカモメ	W	F
	オオセグロカモメ	S	F
	シロカモメ	W	F
	カモメ	W	F
	ウミネコ	S	F
	ミツユビカモメ	W	F
ウミスズメ	ウミガラス	W	F
	ウミスズメ	W	F
	エトロフウミスズメ	W	F
	ウトウ	W	F
ハト	キジバト	S	D
	アオバト	S	A.F
ホトトギス	ジュウイチ	S	A
	カッコウ	S	B

しょうか。

⑫ ウミスズメ科

ウミガラスはいわゆるオロロン鳥ですが、冬季単独で様似港やえりも港でみられました。ウミスズメ、エトロフウミスズメ、ウトウなども海がシケた時に港にはいってくるのを見る程度です。

⑬ ハ　ト　科

キジバトはごく普通にみられますが、アオバトは数が少ないせいか時々見られる程度です。よく見かけるのは山の中ではなく海岸の磯です。数羽の群が塩釜の磯にお

生息場所（A森林　B草原（低木）　C河川沼沢　D田畑牧場　E住宅地　F海岸　G山地）

科名	種名	渡来状況	生息場所
ホトトギス	ツツドリ	S	A
フクロウ	コノハズク	S	A
	オオコノハズク	R	A
	アオバズク	S	A
	フクロウ	R	A
ヨタカ	ヨタカ	S	A
アマツバメ	ハリオアマツバメ	S	B
	アマツバメ	S	F
カワセミ	ヤマセミ	S	C
	アカショウビン	S	C
	カワセミ	S	C
キツツキ	ヤマゲラ	R	A
	クマゲラ	R	A
	アカゲラ	R	A
	オオアカゲラ	R	A
	コゲラ	R	A
ヒバリ	ヒバリ	S	D
ツバメ	ツバメ	S	D
	イワツバメ	S	E
セキレイ	キセキレイ	S	C
	ハクセキレイ	S	C
	セグロセキレイ	S	C
	ビンズイ	R	G
ヒヨドリ	ヒヨドリ	R	A
モズ	モズ	S	B
レンジャク	キレンジャク	W	E
カワガラス	カワガラス	R	C
ミソサザイ	ミソサザイ	R	A
ヒタキ	コマドリ	S	A
	ノゴマ	S	B
	コルリ	S	A
	ルリビタキ	S	A
	ノビタキ	S	B
	イソヒヨドリ	S	F
	トラツグミ	S	A
	クロツグミ	S	A
	アカハラ	S	A
	ツグミ	W	D
	ハチジョウツグミ	W	D
	ヤブサメ	S	A
	ウグイス	S	A
	エゾセンニュウ	S	A
	コヨシキリ	S	B
	オオヨシキリ	S	B
	エゾムシクイ	S	A
	センダイムシクイ	S	A
	キクイタダキ	R	A
	キビタキ	S	A
	オオルリ	S	A
エナガ	エナガ	R	A
シジュウカラ	ハシブトガラ	R	A
	コガラ	R	A
	ヒガラ	R	A
	ヤマガラ	R	A
	シジュウカラ	R	A
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	R	A
キバシリ	キバシリ	R	A
メジロ	メジロ	S	A
ホオジロ	ホオジロ	S	B
	ホオアカ	S	B
	カシラダカ	P	D
	ミヤマホオジロ	W	B
	シマアオジ	S	B
	アオジ	S	A
	ユキホオジロ	W	D
アトリ	アトリ	W	D
	カワラヒワ	S	D
	マヒワ	P	D
	ベニヒワ	W	D
	ハギマシコ	W	D
	オオマシコ	W	A
	ギンザンマシコ	W	A
	イスカ	W	A
	ベニマシコ	W	A
	ウソ	W	E
	イカル	S	A
	シメ	P	D
ハタオリドリ	ニュウナイスズメ	S	A
	スズメ	R	E
ムクドリ	コムクドリ	S	D
	ムクドリ	S	D
カラス	ミヤマカケス	R	A
	ホシガラス	R	G
	ハシボソガラス	R	E
	ハシブトガラス	R	F

りて海水に嘴をいれているのを何度か見ています。おそらく海水を飲んでいるのだろうと思います。

⑭ ホトトギス科

この科の鳥はいずれも特徴のある鳴き方をするので人によく知られていますが、いずれも自分でヒナを育てないという事でどうも好きになれない鳥です。数年間これらの鳥の初鳴を調べたら、ツツドリが一番早く5月5日～10日、ついでジュウイチが10日～14日、カッコウは20～24日という結果がでました。その年によっていくらか違いますが、1週間とはちがわないようです。ツツドリは日没後も鳴き、また早朝2時頃から鳴きだす事もありますが、71年6月アポイ登山口で午後11時頃、ジュウイチが「ジュウイチ、ジュウイチ、ジュウイチ」と三度鳴いて飛んで行くのを確認しています。

（苫小牧市青葉町1　苫小牧西高校）

鳥の紳士録

絵と文　百武充

≪ハシブトガラ≫

はじめてハシブトガラに会ったのは、冬の朝里川温泉であった。ぼくの最初の北海道旅行の、第1日目のことである。そのとき、北海道にコガラとハシブトガラがどんなふうに住み分けているのか、ぼくは全然知らなかった。夕方近く、着いた宿の近くのカラマツにいた3羽のカラも、しばらくはどちらだかわからなかった。だが、枝を移りながら鳴いたその声は、明らかにコガラとは異っていた。ハシブトガラだ！とぼくは思った。北海道で見た新しい鳥の、それは第1号であった。

あれからもう10年になった。ぼくは北海道に住むようになり、ハシブトガラは探鳥会の常連として、なじみ深い鳥になった。しかし、彼等がほんとうに身近な存在になったのは、彼等がぼくの招待に応じて冬の餌台に姿をみせ、ものおじしない態度と活発な動作でぼくを魅了させるようになってからである。

間近な距離から小鳥たちを眺めていると、時おりひどく人間くさい動作に驚かされることがある。そんなときの鳥たちは感情の動きがはっきりと読みとれて、彼等が人間と同じようにものを考える頭を持った生きものであることを、改めて思い知らされる。そして、あの小さな身体の中に、基本的にはわれわれと同じ器官がちゃんとあり、われわれと同じ温かい血が流れているのだということが、信じられないほど神秘的に思えてくるのだ。

春になると、彼等は森に帰ってゆく。毎日姿を見せていた4羽のハシブトガラが、揃って無事に冬を生きのびたのを知るのは、ほんとうに嬉しい。

二冬、ぼくは彼等とつきあった。いや、彼等がぼくにつきあってくれた。ルーティンに疲れたとき、また、うっ積する感情をもてあましているとき、彼等がどれほどぼくの心を和らげてくれたことか。きっと、いつになってもぼくは、アカエゾマツの頂きで春の回帰を頌するハシブトガラの最初の歌を忘れることはないだろう。また冬の森の、枯れた枝先に動く彼等の影を、それから、それが枝を離れ、餌台に向かって飛んでくるときのひたむきな姿を、決して忘れないだろう。だが、それらの記憶は、これから先、果たしてぼくに勇気を与えてくれるのだろうか。それとも、かえって重い荷となってのしかかってくるのだろうか……。

（川上郡弟子屈町川湯、国立公園管理事務所）

森林施業のあらまし

野幌自然休養林

松　田　忠　雄

■原始性の高い国有林

5月の森林は、日ごとにいろをかえる若葉、青葉が光り輝き、さわやかな緑の風が吹き、みるものすべてに生命力のみなぎりを感じる季節。植物は冬の眠りからさめて、いっせいに芽をふき、小鳥たちはわがもの顔にさえずる、一年のうちで一番さわやかな月です。

野幌国有林は、都市周辺のレクリエーション適地として古くからハイキング、山菜採取、探鳥など市民に利用されて、「野幌原始林」の愛称で憩いの場として親しまれてきました。都市周辺に本来の自然植生の姿を残している原始性の高いこの森林地域は、植物分布上からみると温帯から亜寒帯への移行帯（汎針広混交林帯）のなかにありますが、特に野幌付近では温帯と亜寒帯の構成要素が交錯していて、北海道中部以南の平地林としては唯一の針葉樹に富む自然林です。森林景観は、かつてトドマツがよく生育していたのですが、過去数回の風害をうけて、そのおもかげは全く変容してしまいました。しかし、現在なお針葉樹は約30パーセントを占めています。広葉樹は沢ぞいに巨木がよく生育していて、全体としてはエゾイタヤ、ミズナラ、カツラ、シナノキ、ヤチダモ、ハルニレなどが多く、特にヤチハンノキ林、ヤチダモ林、シラカバ林がみられます。

一方、特異な景観としては、明治末期から行われたトドマツ、エゾマツの郷土樹種や本州産、外国産樹の多数の試験林があります。現在ある樹種は約80種の多くに達していて、昭和48年4月の暴風のため成績のよいところに被害をうけたとはいえ、道内では他に類のない森林景観ということができます。

■自然とのふれあい

このような森林地域について、森林施業と森林レクリエーション利用との調和をはかりながら積極的な利用を進めるために、林野庁は昭和43年度から自然休養林制度を設けて、遊歩道、園地、標識等の整備を国有林が自から行い、秩序ある快適な森林レクリエーションの場として広く利用していただくことになりました。この制度のもとで昭和43年10月に札幌営林局長は「野幌自然休養林」を指定して、関係機関等の協力によって、車の乗り入れを禁止し、「自然とのふれあいの場」として利用していただいています。

そこで本誌（23号）で柳沢信雄氏のコメントがありましたので、自然休養林の森林の取り扱いについて少し述べてみます。

ここでは、次のように森林を四つに区分し、それぞれの制限の範囲内で森林の施業を行っています。

森林の取り扱い区分

風致保護地区	景観の保護を必要とする地区で、原則として伐採は行わない。	277ヘクタール
風致整備地区	積極的に風致の整備を必要とする地区で、原則として皆伐は行わない。	658ヘクタール
施業調整地区	風致的配慮のもとに木材生産を行い、健全な森林を造成する地区。	632ヘクタール
施設地区	レクリエーション施設用地として必要とする地区	38ヘクタール

森林に対する国民の要請は多種多様になってきていますが、野幌自然休養林に対しては、特に都市近郊林として保健休養、環境保全、水源かん養、木材生産等多面的な森林機能の発揮が要請されています。これらは空間的、時間的に重複していますので、森林を多目的に適切に利用していくために森林施業の必要性が生じてくるわけですが、このうち原始景観の維持を目的とする森林だけは、特定して取り扱わなければならないので、専用的な利用とならざるをえません。野幌では大沢周辺地区、瑞穂地区、サギの森地区に風致保護地区を設けて原始景観等の維持をはかっています。

たとえば、斉藤春雄先生は、鳥の過去の調査と昭和46年の調査を比べてみると鳥の種類数は増えたが、個体数は減っている。昭和29年以前はよい森林で深山の鳥が生息していた。その当時は畑や草地があって自然の一部があったが、今の森林は荒れて、周辺は畑でなければ住宅地になってしまい、灌木の鳥や原野の鳥が入ってきて種類数が多くなった。今後もいまのまま推移するより、むしろ多くなるであろうと言っています。

野幌の場合は森林の構成要素として、餌、水、営巣場

所、避難場所等がみたされ、野鳥の生息環境としては適した森林地域といえるのではないでしょうか。ところがこのところ森林地域の周辺が住宅地の進行とともに、利用者が増加することによって、特に野鳥に対するマナーが憂慮されますが、「クマゲラ一家」が巣立ったよい例として、時代の流れのなかから愛鳥思想が芽ばえてくることを期待する次第であります。

■鳥、花豊かな自然に

森林レクリエーションには、与えられた森林地域が十分な広さをもつものであれば、その地区を特定してあてることができますが、特に野幌のように各種の森林機能が重複して求められるような場合には、レクリエーションのための森林は必ずしも原始景観を保持するものばかりではなく、「経営された森林は広く変化に富んだレクリエーションを提供する」と言われているように、施業林をあてることが好ましいわけですから、このような森林を風致整備地区、施業調整地区として区分して、森林地域全体の景観の維持、造成の過程で急激な変化を与えないように特に留意して森林施業を行っています。

森林の取り扱いについては、いろいろな要望、意見等を耳にしておりますが、前述のとおり、国有林としてはそこの森林に求められている多面的な機能を総合的に発揮してゆくことを重点として施業を行っているところです。

たび重なる風害のため森林は荒れていますが、この野幌自然休養林で札幌周辺180万市民が末永く、花が美しく咲いているのをみて楽しみ、小鳥の美しい鳴き声をきいて感激することができるように、イキイキとした森林を仕立てて豊かな自然をいつまでも愛護してゆくことが必要です。

〔注〕

森林施業とは　森林を仕立てるのに木をきったり、苗木を植えたり、下草を刈ったりすることをいいます。木をきるのにも区域をきめて全部の木をきるのを「皆伐」といい、また成長が衰えてくる大きな木、あるいは不良な木をきって後継ぎの木の成長を促していく方法を「択伐」または「ぬきぎり」といいます。このように木をきったその跡に苗木を植えたり、下草を刈ったりして丈夫な森林を仕立てていくことです。

（札幌市中央区北2西1、札幌営林局計画課）

役員は全員留任

51年度総会の報告

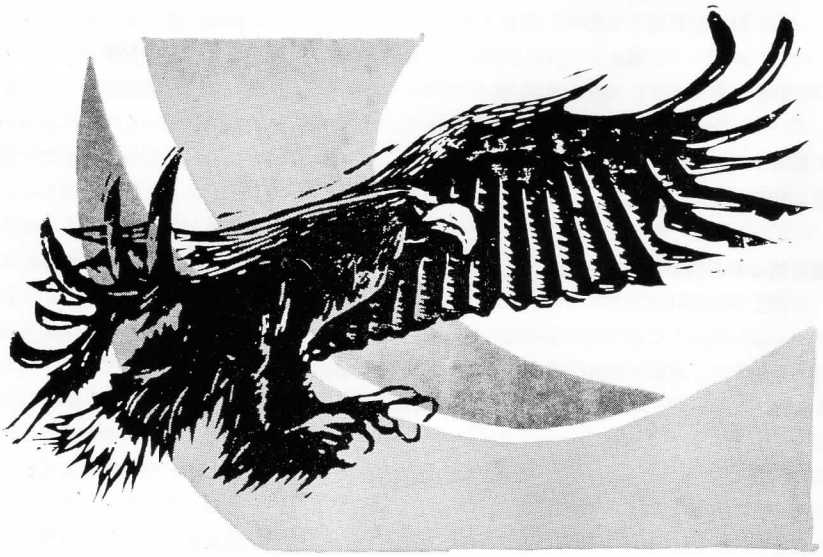
51年度の総会が、8月21日午後1時30分から札幌市中央区の北海道婦人文化会館で開催されました。

審議の結果、昭和50年度の事業報告並びに決算報告、また昭和51年度の事業計画並びに予算案についてそれぞれ承認されました。

なお、役員は全員が留任することになりました（野鳥だより第21号を参照ください）。

総会終了後、引き続き午後4時から役員会を開催して会の運営を推進するための組織検討委員を選出、委員長に土屋文男さん、委員に新妻博さん、野村梧郎さんが、また「野鳥だより」の編集担当幹事代表として小川巌さんが選ばれました。

また、会則についての質疑があり、第8条の4の定めによる代表幹事が置かれてこない旨の指摘がありました。この結果、代表幹事を選ぶこととし、野村梧郎さんが代表幹事となりました。



オジロワシ　版画・森　拓人

シマアジの歓迎 ヤマシギの擬傷

野幌探鳥会の記録

柳　沢　信　雄

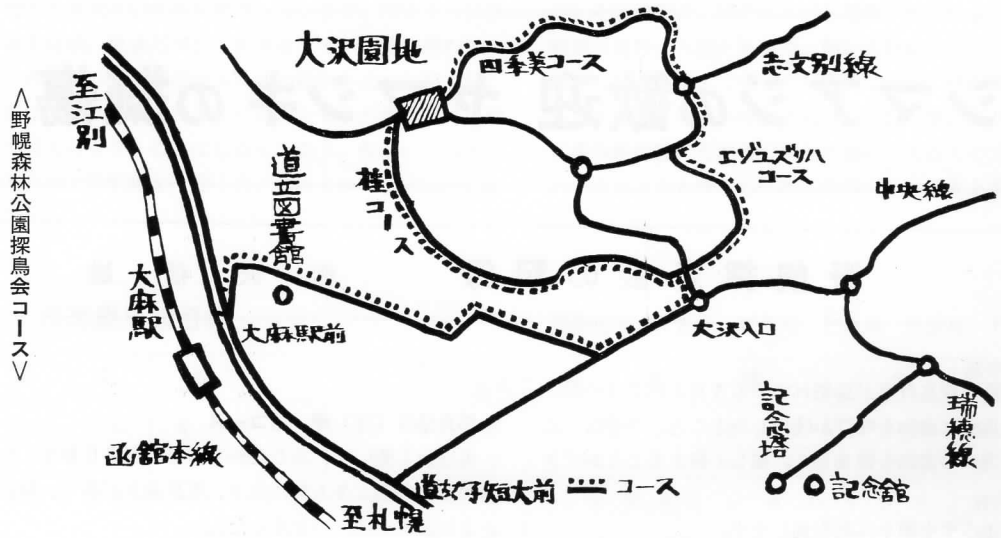
愛護会の探鳥行事が途切れている5月から7月の間、私設探鳥会に参加を呼びかけましたところ、予想以上に多数の方々の参加を得まして、楽しく終えることができました。

そのようすを簡単に報告致します。

5月9日（日）晴　桂コース

風は少し強いが、あたたかく絶好の探鳥日和でした。参加者は40名と多人数になり、家族連れが多く、特に子どもの参加がめにつきました。

種名	5/9	6/6	7/4
1 カイツブリ	○	○	○
2 アオサギ	—	—	○
3 オシドリ	○	○	—
4 マガモ	—	○	—
5 シマアジ	○	—	—
6 トビ	○	○	○
7 ハイタカ	○	—	—
8 ノスリ	○	—	—
9 ウズラ	—	○	○
10 コウライキジ	○	—	—
11 バン	—	○	—
12 オオジシギ	○	○	○
13 キジバト	○	○	○
14 カッコウ	—	○	○
15 ツツドリ	○	○	○
16 ハリオアマツバメ	—	○	○
17 アマツバメ	—	○	—
18 アリスイ	○	—	○
19 ヤマゲラ	○	—	○
20 クマゲラ	○	—	○
21 アカゲラ	○	○	○
22 コゲラ	○	○	○
23 ヒバリ	○	○	—
24 イワツバメ	—	—	○
25 ハクセキレイ	○	○	○
26 ヒヨドリ	○	○	○
27 モズ	○	○	○
28 アカモズ	—	○	○
29 コルリ	—	○	○
30 トラツグミ	—	○	—
31 クロツグミ	○	○	○
32 アカハラ	○	○	—
33 ツグミ	○	—	—
34 ヤブサメ	○	○	○
35 ウグイス	○	○	○
36 センダイムシクイ	○	○	○
37 キビタキ	—	○	○
38 オオルリ	○	—	○
39 ハシブトガラ	○	○	○
40 ヒガラ	○	○	○
41 ヤマガラ	○	○	○
42 シジュウカラ	○	○	○
43 エナガ	○	○	—
44 ゴジュウカラ	○	○	○
45 ホオアカ	○	○	○
46 アオジ	○	○	○
47 カワラヒワ	○	○	○
48 ウソ	○	—	—
49 イカル	—	○	○
50 シメ	○	—	○
51 ニュウナイスズメ	○	○	○
52 スズメ	○	○	○
53 コムクドリ	○	—	—
54 ムクドリ	○	○	○
55 カケス	○	○	○
56 ハシボソガラス	○	○	○
57 ハシブトガラス	—	○	○
計	43	43	42



初めて探鳥会に参加される方、子どもの多いことを考慮して、最短のコース（桂コース往復）にする。

オオルリ、キビタキの美しい姿をゆっくりみせてあげたいと思いましたが、なにせ鳥まかせのことですので、思うにまかせず、両種とも声のみとなったのは残念でした。

それでも、アリスイの姿と鳴き声があったり、この季節に野幌ではめずらしい、シマアジの雌雄をみることができて、まずまずの探鳥会でした。

参加者は次の通り。

谷口一芳、野々村菊、大阪義博、岩泉ゆう子、高杉和秋・富子・恒一・真理子、渋谷栄一・恭子・美求、今野牧子・有子、田面正志・美和・真優美、半沢正九郎、苣野寿衛吉、溝部泰子、飯山五玖子、新妻博、藤谷昭典・雅貴、早瀬広司、吉本利明、森拓人・やよい、白沢昌彦、小野寺敬子、馬場錬成、野口正男、羽田恭子、黒沢隆、柳沢信雄・千代子、酪農大生４名（以上40名）

6月6日（日）曇時々雨　エゾユズリハ・四季美コース

雨と風のきびしい探鳥会となりましたが、予定通り実施しました。参加者は14名と少なかったが、林内の人影が少なく、鳥達はおちついていて、ゆっくり観察させてくれました。途中でヤマシギの親鳥の擬傷と巣立ち間もないヒナをみたり、雨の中を、遊歩道に張り出したみやすい枝の上で熱心に鳴き続けるウグイスの姿をゆっくり観察することができました。

参加者は次の通り。

立川靖弘、池野はるみ、曽山佳宏、岡田智己、早瀬広司、野々村菊、小野寺敬子、馬場錬成、野口正男、溝部泰子、羽田恭子、黒沢隆、柳沢信雄・千代子(以上14名)

7月4日（日）晴　エゾユズリハ・四季美コース

この日は探鳥よりも、途中の皆伐された林と、草原をほりおこしての大規模宅地造成の動きをみせつけられてびっくりしたことでした。

私有地ですから、いつかは宅地化されるだろうと皆が半ばあきらめていたことでしたが、こんなに早く、このように大がかりな造成工事は考えてもみなかったことです。

毎年、春と秋に鳥たちが翼を休めたわずかな林と広々とした草原が、あとかたもなく消えてしまうことを、みんなでなげき悲しむ会となってしまいました。

帰り道、道立図書館近くのわずかに残されている一筋の水源かん養林内から、クマゲラの幼鳥の声を耳にし、二羽の元気な姿をみることができました。

まわりでさわぐカラスの群を心配し、無事に成鳥になることを祈りました。

参加者は次の通り。

平井さち子、百武千恵子、村田信義・謙子、岩泉ゆう子、立川靖弘、苣野寿衛吉、野口正男、溝部泰子、早瀬広司・富、小野寺敬子、新宮康生、羽田恭子、黒沢隆、柳沢信雄・千代子（以上17名）

初心者の人参加しませんか

愛護会の探鳥会だけでは物足りなく、もっと数多く野鳥に接したい方、鳥仲間と情報を交換したい方などの参加を歓迎致します。

また、初めての方でもよろこんで参加いただける探鳥会となるよう心がけています。今後も折りを見て探鳥会を行ないますので、予定を知りたい方は連絡ください。

＜連絡先＞　札幌市白石区栄通８―86
電 話 851 ― 6 3 6 4　柳沢信雄
札幌市中央区円山西町 491
電 話 611 ― 0 0 6 3　羽田恭子

オオルリ1羽　2万円

店頭に出ていた野鳥たち

編　集　部

"カゴの鳥" となった珍鳥

10月上旬、会員のHさんからこんな電話がかかってきた。札幌市中央区北3西30の「M生物店」の店頭でたくさんの野鳥たちが売りに出ているというのだ。Hさんが確認してきた鳥の種類は、オオルリ、クロツグミ、コマドリ、イカル、サンコウチョウ、コガラ、ヤマガラ、ニュウナイスズメ、キジバト、ウグイス、メジロの11種。

Hさんがとぼけて「この鳥たちは何という名前ですか」と店主に聞いてみたところ、いかつい顔でジロリと睨まれ「まあ、いろいろいますわ」。Hさんがなおも店内を偵察していると、店主はジョウロで水をまきながらHさんの足元にもジャージャー。さっさと出ていけと言わんばかりの応対に、Hさんは怖くなって外に出たという。

「2万も3万もするよ」

早速、私も同店を訪ねてみた。プロレスラーのようながっしりした体格の50年配の店主に、私は「友人の結婚祝いに鳥を贈りたい。この鳥は何という鳥ですか」とオオルリを指して聞いてみた。

「それは日本の山にいる野鳥だから、売らないよ」

「しかしこんなきれいな鳥は珍しい。是非、欲しいのですがダメですか」

「予算はいくらなんだ」

「はい、1万円です」

「それでは足りないな。それは（オオルリのこと）2万円だよ」

「それじゃあ、こっちの（と言ってクロツグミやヤマガラの方を指して）鳥はいくらですか」

「ダメ、ダメ。そこにいる鳥は皆2万も3万もする鳥だよ。1万円ならせいぜいこの鳥だな」と店主はインコ類のトリカゴを示した。

違法はヒヨドリ1羽

私はM生物店を出たその足で、道警本部防犯部に「店頭の鳥が違法販売でないかどうか捜査して欲しい」と訴えた。ところが、捜査当局は多忙を理由に2か月間も私の訴えを放置。再三の催促の結果12月上旬になってやっと店主から事情を聞いた。

札幌西署と道自然保護課の調べでは、同店で売りに出ていた鳥は次のものだった。ノジコ、ホオジロ、ウグイス、イカル、コガラ、クロツグミ、ヤマガラ、ツグミ、コマドリ、オオルリ、ヒヨドリ、キジバト、ニュウナイスズメ。このうちキジバトとニュウナイスズメは狩猟鳥なので、正当に捕獲された場合は飼育も販売も自由。残りの鳥のうちヒヨドリだけ「飼育許可証」がなかったがあとは、すべて許可証付き。この鳥たちのほかシマアオジ、シマノジコ、ホオジロの仲間の鳥数種もいたが、こちらはすべて「輸入証明書」付き。結局、違法販売はヒヨドリ1羽となった。このヒヨドリは即刻、放鳥することになったが時期が悪いので来春まで円山動物園で預かることになり、この一件はケリとなった。

抜け穴だらけの保護法律

ところで野鳥を飼育する場合は「飼育許可証」が必要だが、道は、野鳥たちを手厚く保護するとの目的でさる46年から新規の許可証は一件も出していない。つまり、今出ている許可証はすべて45年以前に発行したもので、全道でまだ3851羽分が出まわっている。しかしこの許可証は一年毎の更新制度をとっており、鳥が死んでしまえばその鳥に付いていた許可証は自然消滅となる。従っていずれは許可証が一枚もなくなる日がやってくるはずだが、ここに抜け穴がある。

つまり、許可証の付いている鳥が死んでも、同種の別の鳥にすりかえてしまい、あたかも元々の許可証付きの鳥であったかの如くごまかすことが可能になっている。だから許可証があったと言っても、それをにわかには信用できない。その証拠にM生物店の店主は、当局の調べに対して「鳥が死んだらすぐ補給する」とぬけぬけと供述。「それならどこから（鳥を）手に入れるんだ」との質問に「それは言えない」とつっぱねたという。野鳥を販売する店には、野鳥を違法に捕獲する悪人どもが出入りすると聞くし、それを承知で注文を出す客がいるとも聞く。

カスミ網を使用することは禁じられているが、製造も販売も規制していない抜けた法律（鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律）。そしていつも及び腰の警察と行政当局。

会員の皆さん、本当の鳥獣保護のために、折りにふれて警鐘を鳴らしませんか。もし身近に、同じようなケースがあったら是非、編集部までお知らせ下さい。黙っていたら野鳥は減る一方です。

初認記録をどうぞ

本来なら夏か秋の号に初認記録を掲載するのが時宜を得ているのに、今年は編集体制が整わぬうちに日がたってしまい一括掲載できずにいます。そうとは知らず記録を寄せて下さった多くの会員にご迷惑をおかけしていますが、2月に発行予定の号に一年遅れながら初認記録をまとめることにしました。恐らく会誌発行の遅延を見越して、せっかくの記録を寝かせたままの会員も多いのではと想像しております。手紙、ハガキのいずれでも結構ですので、この際にぜひどうぞ。

なお23号でもお知らせしました通り、北海道における代表的かつポピュラーな下記の夏鳥の記録は、従来毎号欠かさず寄せられていますので、出来るだけ多くの地域から記録が集まることを期待しています。もちろん、これ以外の鳥の初認記録や終認記録でも結構です。

オオジシギ、ジュウイチ、カッコウ、ツツドリ、ヨタカ、アリスイ、ヒバリ、ビンズイ、モズ、アカモズ、ノゴマ、コルリ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、コムクドリ。

〔編集部から〕 今号から原稿の筆者と編集委員の住所を入れました。質問、照会、要望等会員同士の交流を深めるのにご利用下さい。

編集後記

☆ 8月に開かれた総会で、編集担当代表幹事などという奇妙な役目を文字通り押しつけられてから早くも3か月がたちました。なり手がなくて難航した委員の人選、打合わせを経て、ようやく本来の業務である編集作業にかかれたのは11月に入ってからのこと。まずはこの間の怠慢をお詫びしなければなりません。

☆ それでも新委員のやる気は十分で、任期の3月末までには年間のノルマである4号分は刊行する意気ごみでいます。ようやく暖たまったエンジンを冷却させないためにも、原稿、意見等をお寄せ下さい。

☆ 誌面の使い方をあれこれ検討した結果、記録性のある報告を毎号連載することにしました。本号ではまず日高の鳥を、次号では羊ケ丘の鳥を組んでいます。これを機会に、フィールドノートの記録を整理してみてはどうでしょうか。道内各地の記録が集まることを待望しています。（小川巌 札幌市北区北9西9 北大農学部応用動物学教室）

☆ 編集委員を引き受けたものの、事が思うように運ばず会員の皆様にも迷惑をかけました。その点お許し下さい。ところで、愛護会の運営のあり方にはさまざまな問題点を内包したまま、会自体が中途半端な存在になっていることを改めて認識しました。この会をより発展的、活動的にするため私なりに努力してみる積もりです。会員の皆様の建設的な意見を是非お聞かせ下さい。（馬場錬成 札幌市南区真駒内緑町五輪団地7—102）

☆ やりたい事は、山程あるのに、人生は短すぎるのです……などと言いながら遂に今回、編集のお手伝いをさせていただく事になりました。割りつけ、校正、私にとっては、新しい分野。好奇心、ここにとどめを刺します。

☆ 鳥との最初の出会いは……。凍てつく冬の朝凍りついた窓辺に、残りご飯をパラパラとまくとチュンチュンと寄って来たスズメたち。幼いあの頃、スズメたちの会話が聞きとれた様な気がします。そしてまた、夕焼け空に、ねぐらへ急ぐカラス。一羽二羽数えきれない程の群、やっと数を覚えた頃のこと。

☆ 日曜日、散歩に出かける時は、首に双眼鏡、脇に鳥類図鑑（まるでロンドンはバッキンガム宮殿の衛兵のよう）。でも、鳥はなかなか覚えられません。（飯山五玖子 札幌市南区真駒内緑町五輪団地506）

☆ 先日、野幌へ行ってきました。キクイタダキ、クマゲラなど鳥たちは、雪の中、採餌に一生懸命でした。これからは冬のお客様が来る季節。どんな顔ぶれがそろうか楽しみです。

☆ 今号から編集委員の一人に加えさせていただくことになりました。新聞編集という商売柄、何かお役に立てばと思っております。鳥たちとは付き合いが浅く、素人ですが、読みやすい親しめるものにしたいと思っておりますので、叱咤激励、要望等なんでも結構です、どんどんお寄せ下さい。（森拓人 札幌市豊平区旭町9—76、読売AP）